

〈入選〉

夢を下さい 緑の夢を

札幌市立西野中一年

木村 好江

だんだんと少なくなっていく山々の自然を、さみしく見つめているのは、私だけでしょか。

今、こうして目をつむってみると、小さいころ、友達と一緒に木登りをしたり、タンポポをつんだり、野の草を集めてはままごしたり、野花をいつもかごいっぱいに摘んだっけ。いつだっけ遊び相手になつてくれた自然……。その自然が今、失われていくのかと思うと、胸が締め付けられる思いです。

あれは確か、私が四年生のころだと思えます。その日はひどい土砂降りで、家の近くのがけ縁が土砂崩れにあったのです。近くの家では、家の中まで土が入りこみ、窓は割れ、タンスが土の中に半分埋まっていたり、倒れていたのを母と一緒に見に行った。また、いたる所で川があふれ、道路が洪水になつたりしたこと、今も鮮やかに思い出されます。

これとほぼ同じころ、がけ縁の前に小さな事務所ができ、そこに砂や砂利が山積みになつて運ばれ、色々な機械がずらりと並び、そのうち、「シューシュー」と

いうけたたましいやな音を立てて、何やらやっているではありませんか。

よく見ると、それは、がけ縁に生コンを吹き付けている音だったのです。あつという間もなく、あの青々と葉を茂らしていたがけ縁は、みるみるうちに、灰色のカーテンを引かれたようになってしまつたのです。あまりにも突然な出来事に、私はなんだか夢を見ていた様な気がしました。

だつて、今年の夏には、もうあのセミの声も、小鳥達の美しい歌声も、そして来年の春には、泉や、スミレの花が咲くことも、木々からは聞こえないのです。家の前にぼつかりと穴が開いたようでした。

そんなある日、社会科の授業で「公害のことについて話し合いをした時、植物は、人間から吐き出される二酸化炭素を吸って酸素を吐き出すことを知りました。

私は小さいころからぜん息で、いつも両親は、移り住むのなら「空気が良い所」を一番に考えてくれました。だから私は、人一倍、緑に対して親しみを感じているのです。

ぜん息で発作が起きた時、私は揺れる木々の小枝を見ると、「緑だつて、どんな苦しみだつて乗り越えて来たんだ。いくら切られても、また芽が出てくる。こんな少しの苦しきで負けてたまるものか!」と思うのです。私が健康でいるのは、緑の生命力のすばらしさから出来上がったものではないでしょうか。

私の故郷室蘭は、工業で栄えた所ですから、私のほかにもぜん息で苦しむ人々がたくさんいます。そのため、工場の周りには、木を植えたり、道路の両側にも、

公園にも木が植えられました。このように、自分の家を立てるためといって、山が、自然が、どんどん切り崩されて来ますが、半面、緑の大切さを知り、自然をもっともつと大切にしようという地域もあるのです。

でも、これだけでは少ないのです。少なすぎるのです。自分になくはない物を、私達は、自分達の手で、無くしているのです。公園に植えるとか、道路の脇に植えたとかいいいますが、それより、生活の中に緑を、自分の部屋に自然を……といったように、もつと身近な物にしなければならぬと思います。

今、西野の山々には、桜が、梅が、こぶしが、ライラックが、色とりどりに咲き乱れている。それを見て「自然って大きいな。美しいな」と、しみじみ思うのです。